

修証義

第一章 總序

生しょうを明あきらめ死しを明あきらむるは仏家ぶつけ一大事いちだいじの因縁いんねんなり、生死しょうじの中なかに仏ほとけあれば生死しょうじなし、但ただ生死しょうじ即すなわち涅槃ねはんと心得こころえて、生死しょうじとして厭いとうべきもなく、涅槃ねはんとして欣ねごうべきもなし、是時このとき初めて生死しょうじを離はなる分ぶんあり、唯一ただいち大事だいじ因縁いんねんと究尽ぐうじんすべし。人身にんしん得うること難かたし、仏法ぶつぽう値おうこと希まれなり、今我等いまわれら宿善しゆくぜんの助たすくるに依よりて、已すでに受うけ難がたき人身にんしんを受うけたるのみに非あらず、遇あい難がたき仏法ぶつぽうに値あい奉たてまり、生死しょうじの中なかの善生ぜんしょう、最勝さいしょうの生しょうなるべし、最勝さいしょうの善身ぜんしんを徒いたすらにして露命ろめいを無常むじょうの風かぜに任まかすること勿なかれ。無常むじょう憑たのみ難がたし、知しらず露命ろめいいかなる道みちの草くさにか落おちん、身み已すでに私わたしに非あらず、命いのちは光陰こういんに移うつされて暫しばらくも停とどめ難がたし、紅顔こうがんいづくへか去さりにし、尋ねんとするに蹤跡しやうせきなし、熟觀じゆつかんずる所ところに往事おうじの再ふたび逢おう

べからざる多し、無常忽ちに到るときは国王  
大臣親暱従僕妻子珍宝たすくる無し、唯独り  
黄泉に趣くのみなり、己れに随い行くは只是  
れ善悪業等のみなり。今の世に因果を知らず  
業報を明らめず、三世を知らず、善悪を弁ま  
えざる邪見の党侶には群すべからず、大凡因  
果の道理歴然として私なし、造悪の者は堕ち  
修善の者は陞る、毫釐も忒わざるなり、若し  
因果亡じて虚しからんが如きは、諸仏の出世  
あるべからず、祖師の西来あるべからず。善  
悪の報に三時あり、一者順現報受、二者順次  
生受、三者順後次受、これを三時という、仏  
祖の道を修習するには、其最初より斯三時の  
業報の理を効い験らむるなり、爾あらざれば  
多く錯りて邪見に堕つるなり、但邪見に堕つ  
るのみに非ず、悪道に堕ちて長時の苦を受く。  
当に知るべし今生の我身二つ無し、三つ無し、

徒らいたずらに邪見じゃけんに墮おちて虚むなく悪業あくごうを感得かんとくせん、惜おし  
からあざらめや、悪あくを造つくりながら悪あくに非あらずと思おも  
い、悪あくの報ほうあるべからずと邪思じゃし惟ゆいするに依より  
て悪あくの報ほうを感得かんとくせざるには非あらず。